

『裸心-ラシン-』 - みづか みひろ

※お読みいただく際はブラウザの横サイズを調節してください。より快適にお読みいただけます。

ざわめく教室で、前の席に座っているクラスメートのうち、何人かが、わたしを振り返っていた。「きっとやってくれるだろう」という、期待を孕(はら)んだ視線。

わたしはその重圧(プレッシャー)に耐えきれず、右手をまっすぐに上へ挙げた。

直後、教室は一瞬静かになる。が、騒がしさをすぐに取り戻した。

「おっ、やってくれるか、坂崎」

教壇に立つ男性教師は、ホッとした表情を浮かべる。

文化祭のクラス代表者を、このホームルーム中に決めなければいけない。代表者は男女ペア。その片方が、たった今、わたしに決まった。

「男子も少しは坂崎を見習え。誰かがやらなくちゃいけないんだぞ、おい」

担任が男の子たちに言うと、彼らはさらに話し声を大きくした。

——お前やれよ。

——やだよ、めんどくせー。

なすりつけ合う言葉が、ざわめきの中から聞こえてくる。

「あーあ、男らしくないよね。誰か、恵莉(えり)みたいにビシッと立候補するやついないのかなあ？」

後ろの席の女の子が、わたしの耳元で呟いた。彼女の言葉に、わたしは肩を揺らして見せただけで、返答はしなかった。

しょうがないことだ。

代表者とか責任者とか、この手の仕事は、みんなやりたがらない。面倒だし、大変だから。先頭に立ってみんなに指示する側よりも、あれこれ指示される側の方が気楽なのだ。

わたしだって、本当なら、代表者なんてやりたくない。

「じゃんけんで決めるみたいね」

男の子たちはみんな席を立て、教室の片隅に集合していた。じゃんけんの音頭が聞こえてくる。そして勝敗が決まるたびに喜びの声や悲鳴があがる。

じゃんけん大会はあっという間に終わった。

集まっていた男の子たちが解散し、各々、席に着いていく。

「それで、男の代表者は誰に決まったんだ？」

担任がため息混じりに発する。

と、廊下側の席から、はい、という返事がした。見ると、その席に座っている男の子は苦笑いしながら中途半端な高さに手を上げていた。いかにも、じゃんけんに負けたからしかたなく、という感じだ。

とはいえ、代表者が二名とも決まったことに変わりはない。担任は満足げにウンウン頷いていた。

「男子は空野(もくの)か。くれぐれも、坂崎の足を引っ張るんじゃないぞ」

担任に冗談ぼく言われた空野くんは周りの友達と笑っていた。

空野秀重(ひでしげ)くん。クラスメートの男の子。だけど、今まで一度もわたしは彼と話したことがない。普段、友達と話したりしているのを見ていると、普通の男の子という印象を受ける。特に目立つ存在でもない、一般的な男子生徒だ。

「よし。じゃあ、坂崎と空野は代表者として頑張ってくれ。他のみんなは二人に協力するように」

担任がそう締めくくり、今日のホームルームは終了となった。放課後になると、担任が教室を出て行き、それからみんなが席を立ち始める。教科書の詰まった鞆を持って、わたしも椅子から立ち上がった。

すると、いつも一緒に帰る女の子二人が、鞆を持ってすぐに寄ってきた。

「また恵莉、今年も代表者じゃない。去年もやってなかったっけ？」

「もお、恵莉ってば頑張りすぎー」

二人は笑いながら言ってくる。

「いいのよ。わたし、人のために何かするのって、好きだから。全然、苦じゃないわ」

わたしがそう嘘をつくとき、彼女たちは「すごいなあ」「えらいなあ」と感心したように口にする。

「恵莉って完璧だよな。勉強も運動もできるし」

「うん。その上、面倒見もいいし。なんていうか、アタシらじゃ敵わないぐらい、いい女よね」

そんなふうの中身の無い会話をしながら、教室のドアに向かってわたしたち三人はぞろぞろ移動する。と、ドアの手前で、わたしは立ち止まった。

「ちょっと待ってて」

二人に言うと、廊下側の席の、空野くんのもとまで歩いていく。

空野くんは数人の男友達と席に座ったまま談笑していたけど、近づいてくるわたしに気づくと、おしゃべりをピタリとやめて、不思議そうにわたしを見る。他の男の子たちは黙ったまま、わたしと空野くん視線を向けていた。

「空野くん」

「あ、俺に用なんだ。なにかな、坂崎さん？」

空野くんはちょっと硬い口調だった。今まで一度も言葉を交わしたことがないから、それも当然だろう。

「用事ってほどじゃないんだけど」

わたしは努めて、砕けた感じで言う。

「同じ代表者として、これからよろしくね」

「へ？」

空野くんは唇を丸くした。びっくりしたみたいだ。

「そんなこと、わざわざ言わなくてもいいのに」

「でも、こういうのは礼儀だから。ちゃんと挨拶しておかなくちゃって思って」

「やっぱりマジメなんだな、坂崎さんって」

苦笑いを浮かべると、空野くんは咳払いを一つした。

「こちらこそ。これからよろしく」

「うん」

これで用件は済んだ。同じクラス代表者になったのだ。しばらく一緒に作業することを考えると、一声かけておくに超したことはない。それが一度も口を利いたことのない相手ならなおさらだった。

「じゃあ、また明日ね」

空野くん、それから、その友達に小さく手を振ると、わたしは教室のドアのところで待っていてくれた友達と合流した。

「お待たせ。さ、行きましょ」

教室を出る。と、すぐに一人が訊いてきた。

「空野となに話してたの？」

「特になにも。ただ、これから代表者としてヨロシクって言っただけ」

「それだけ？」

「そうよ」

友達二人は揃って「ふうん」と頷いた。

三人で廊下を歩いていく。廊下の窓から見える風景はもうオレンジ色だ。ちょっと前なら、この時間でもまだ外は明るかったのに。

夏休みが明けてから、すでに一ヶ月。

生徒の制服は白から黒に変わった。男子はカッターシャツの上に黒の学ランを着るようになったし、女子も透ける心配の無い、紺色のセーラーになった。

もう秋が来ている。文化祭が終わる頃には、冬が近づいているはずだ。

「でもさあ、やっぱり恵莉ってすごいよね。今日のホームルームだって、自分がやるって言えるんだもん」

思い出したかのように友達がそう言った。すると、もう一人が呆れたふうに戻す。

「アンタも、ちょっとは恵莉を見習ったら？」
「うっ……いやー、あっしなんか器じゃありませんわ」
「器って、なによそれ。まあ、たしかに、アンタと違って、恵莉ならどんなことでも上手にこなせるものね」

わたしは彼女たちに困った顔を見せた。
「やめてよ、二人とも。わたしはただ、自分にできることをしているだけよ。そんなふうにおだてられるためにやってるんじゃないわ」

「ほーら」
「加えて無欲ときたもんだ」

二人はわたしをからかい、笑った。
この子たちは、わたしをスゴイという。勉強も運動も人並み以上にできて、みんなが避けたがる道を進んでいくから。たったそれだけの理由で、わたしを「いい人」と思っている。

本当は違うのに。
みんな、本当のわたしを知らない。



今回は四万円。高くも低くもない値段。
ただ、困ったことに、相手の男性はマグロだった。自分から何もしようとしない。受けに回ったままの男。そのくせ注文は人一倍なのだから、たまったものじゃない。
「エリちゃん、そのまま、前後に動いて……」

また、だ。
心の中で悪態をつきながらも、わたしは笑顔で「うん」と頷いた。お金を払ってもらっているのだから、嫌だとは言えない。
部屋の照明は、サイドテーブルのライトのみ。そこから漏れ出てくる橙色の淡い光が、ぼんやりと周りを照らし出している。ベッドのわきには、わたしと男性の服が無造作に落ちていた。

わたしたちはお互いに裸のまま、騎乗位で繋がっている。
わたしはそれまで上下させていた腰を注文されるままに、前後に動かし始めた。結合部分が水音を立てる。見るともなく見てみると、わたしの陰毛と男性のそれとが透明な粘液に濡れ、絡まり合っていた。

「気持ちいいですか？」
男性の胸板に手の平を置き、訊いてみる。
相手は夢見心地な——といっても暗くてよく見えない——表情を浮かべたまま、うめくように返事をした。

「そう、良かった」
「エリちゃん……エリちゃんは、どう？」
「わたし？ わたしも気持ちいいですよ」
もちろんリップサービスだ。本当は大していい気分ではない。自慰している方がはるかにいい。ただ相手の機嫌をとるために、気持ちよさそうなフリをしているだけだ。

「はっ、あ」
嘘の声と、嘘の表情。
それで相手は満足する。
「いいよ、いいよ、エリちゃん」

男性は体の上で揺れているわたしに手を伸ばす。腰のくびれをなぞり、バストを下から掬(すく)う。大してなにも感じなかったが、社交辞令程度に「あっ」と喘いでみせる。

この男性とは知り合いじゃない。つい数時間前に、初めて会った人だ。男性はお金を払い、わたしはその見返りに脚を開くことを約束していた。

わたしは援助交際(うり)をしているのだ。
「くっ……激しく動いて、エリちゃん！」

「うんっ」

男性の腰の両側に足を立てて、体を上下に跳ねさせる。ベッドのサスペンションがあるぶん、いくら楽だけど、ずっとこんな動きをしているとだんだん疲れてくる。

早くイってもらおう。

わたしは男性の部分を締め付けながら、前屈みになり、相手の胸元に唇を寄せた。ペロッと相手の乳首を舐める。

「うあっ、エリちゃん、それいい！」

「ん、う……じゃあ、もっとしてあげますね」

男性の胸を執拗に舌先で愛撫する。

反応は上々。

胸をいじられたことによって、男性の射精欲は一気に高まったようだった。その証拠に、男性の息づかいがさらに荒くなっていく。

「だ、ダメだ、エリちゃん！ ボク、もうイきそうだ！」

「いいですよ。ゴムしてるから、このまま中に出してください」

ここまで来れば、もうあと一息だ。

わたしがひとときわ激しくお尻を振って、ラストスパートをかけると、男性は「イク！」と苦しそうに呟き、わたしの中で達した。

わたしは達しなかった。そもそも、わたしは男の人で一度もイったことがない。いつも不完全燃焼。でも、べつに文句はない。最初から相手に期待なんてしていないのだから。

「ん」

相手の射精が収まるのを見計らって、結合を解く。

「いっぱい出ましたね」

男性の被っていたゴム——コンドーム——は、風船のように先端が精液で膨らんでいた。ゴムを外し、中身が出ないように、出入口を結ぶ。いつもしているから、もう慣れた作業。それが終わると、またいつものように、わたしは口内に男性を迎え入れる。行為後にこうしてあげることで、相手はさらに悦(よろこ)ぶのだ。もちろん、わたしにとっては気持ちのいいものではない。性交後の陰部なんて、自分と相手の体液に濡れていて、しょっぱいような苦いような変な味と匂いしかしない。

「ああ、エリちゃん。すごく気持ちよかったよ」

「……そう言ってもらえると、わたし、嬉しい」

男性の指が前髪を撫でてくる。馴れ馴れしい。相手に悟られないようそれを避けるため、顔を横にして、男性の側面に舌を這わせる。

その時、ベッド近くの壁にかかった大きな鏡に、自分の姿が映っているのが見えた。

裸の男性に奉仕している、裸のわたし。

学校の誰も知らない、わたしの姿だった。



わたしは、誰もいなくなった教室で一人、席に座っていた。机の上に広げられているのは一枚の白紙。

「どうしよっかな……」

頬杖をつく。なんとなく視線を落とすと、わたしの足もとにまで西日が差し込んでいた。夏と違って、夕陽の光は優しく、温かい。

耳を澄ませる。

運動場からの運動部の荒々しい声。

別校舎で吹奏楽部が奏でている楽器の音色。

開け放たれたドアから聞こえてくる、廊下をゆく足音。

坂崎さん、とわたしを呼ぶ声。

「え？」

呼ばれたことに気づいて、わたしは振り返った。教室のドアのところに、男の子が一人、立っていた。クラスメートの小林くんだ。

「ああ、なんだ、小林くん……どうしたの？」
「べつにどうってわけじゃないんだけど、さ。ちょっと通りかかったら、坂崎さんが見えて、それで」
特に用事は無いらしい。
わたしは内心で少し驚いていた。こんなふうにならぬなんて初めてだったからだ。この男の子とは去年も同じクラスだったが、まともに会話をしたという記憶は無い。挨拶ぐらいならしたかもしれないけど……。
小林くんはわたしの隣の席近くまで歩いてくる。
「坂崎さんは、なにやってるの？」
「友達を待ってるの。いつも一緒に帰ってる子が、ちょっと職員室まで怒られに行ってる」
「そう、なんだ……あ、その紙は？」
わたしは机の上の白紙をつまみあげた。
「ヒマだから、文化祭の出し物、どうしようかなって考えてたの。でも、何もアイデア浮かばなくて。空野くんにも相談しないって、思ってたところ」
「空野……」
呟いて、小林くんは顔を一瞬険しくした。そう感じたのは、わたしの勘違いだろうか。
「坂崎さん、僕……」
「ん？」
「僕、実はね……あの時、手を挙げれば良かったって、ずっと後悔してるんだ」
床に反射する西日のせいかな、彼が顔を赤らめているように見える。
「あの時？」
「文化祭の、クラス代表者を決める時……」
「どうして？ そんなに代表者になりたかったの？」
違う、と小林くんは小さく頭を振った。
「坂崎さんと、代表者の仕事、したかったから」
わたしはつかの間、言葉を無くした。
「それって、どういう……」
「僕、坂崎さんのこと、前から好きだったんだ」
告白だった。
好き。そう口にしたら、小林くんは黙りこくってしまう。
きっと彼は、計画立ててこの告白をしたわけではないはずだ。ここにいたわたしをたまたま見つけて、会話の流れで「好き」と言ったのだろう。
ヘタに飾った告白じゃないぶん、彼の言葉は素直に嬉しかった。
「ありがとう、小林くん」
けど——
「でもわたし、今は誰とも付き合うつもり、無いの。だから、ごめんなさい」
——結局は「嬉しい、止まりだ。それ以上の気持ちは生まれてこない」
「そ、そっか」
小林くんはますます顔を紅潮させる。告白した経験があまり無いのかもしれない。
「僕のほうこそ、ごめん。急に好きなんて言って……」
「ううん、いいの。迷惑なんかじゃないから」
わたしのフォローに、彼がぎこちない笑いを浮かべる。
「えっと」
小林くんは何かを言おうとしたが、いつまで経っても、彼の口からは一言も出てこなかった。わたしもわたしで、この場を離れるわけにもいかず、ただ静かにほほ笑んでいるしかない。
間の悪い沈黙。
それを破ったのは、第三者の声だった。
「あれ？ 坂崎さん……と、小林じゃん」
わたしと小林くんは、驚いて声のした方を見た。教室の出入口に、空野くんが立つ

ていた。手に鞆を持っている。

「二人きりでなにやってんだよ。怪しいなあ」

冗談ぼく言いながら、杵野くんはわたしたちに向かって歩いてくる。それにまっ先に反応したのは、小林くんだった。

「じゃあ、僕、もう行くから」

「あ……」

小林くんは、わたしに別れの挨拶をする暇さえ与えず、一目散に教室を走り出て行った。後に残されたわたしと杵野くんは、彼の姿が消えたドアを見る。

「なんだ、あいつ？」

不思議そうに言うと、杵野くんはわたしの方を向いた。

「坂崎さんって、小林と仲良かったっけ？」

「あんまり話したことは無かったわ。去年と今年で、同じクラスっていうだけ」

「ふうん」

特に感心も無さそうに頷いた杵野くんは、廊下側の自分の席へ歩いていく。

「杵野くんは教室になにか用事だったの？」

「あー、うん。プリントを忘れちゃって……あった、あった」

自分の机の中からプリントを出すと、持っていた鞆へしまう。

「こう言っちゃなんだけどさ」

プリントを片付けながら、杵野くんはわたしの方を見ずに喋りかけてくる。

「さっきの小林と坂崎さん、なんだか変な雰囲気に見えたぜ。話すわけでもなく見つめ合っちゃって。一瞬、告白の現場に立ち入っちゃったかと思った」

「そうよ」

杵野くんは鞆の口を閉じる手を止めて、わたしを振り返った。

「わたし、さっき告白されてたの、小林くんに」

別に隠すつもりは無かった。こういう話は、遅かれ早かれ誰かの知るところとなる。だから、秘密にしておいても無駄なような気がしたのだ。

「そ——そっか」

ばつが悪そうに、杵野くんは目を逸らす。

「じゃあ、俺、小林に悪いことしちゃったな。邪魔したみたいで……」

「ううん。悪くなんてないわ。かえって小林くん、杵野くんに助けられたと思う」

「どうして？」

わたしはほほ笑むだけで、なにも答えなかった。

それで伝わったらしい。

「……なるほど。断わったんだな」

わたしはゆっくり頷く。

プリントを片付け終えた杵野くんは、息を吐き出しながら、そのまま自分の席に座った。

「小林も気の毒に」

ぼつりと杵野くんは独り言のように呟いた。わたしと杵野くんの席は四列ぶん離れている。そのせいか、彼のその呟きは聞き取りづらかった。

「坂崎さんってさ」

今度の声はしっかりとわたしに届いた。

「告白とか、よくされるんだろ？」

「うん……たまに、ね」

「やっぱりモテるんだな」

杵野くんの言葉に、わたしは首を振った。

「でも、不思議だよな」

「うん？」

「小林もだけどさ、あんまり話したことのない相手に、よく告白できるよな。あ、もちろん、坂崎さんがどんな感じの人かとか、そういうのはわかるぜ」

でも、と杵野くんは続ける。

「やっぱり実際に喋って相手を知らなくちゃ、告白のしようが無いと思うんだ」

わたしは空野くんの言葉に驚いていた。

「空野くんって、けっこう深くモノを考えるんだ」

「そういうわけじゃないけどさあ……たとえば、一度も話したことのない女子に、誰かが告白すると仮定するだろ。でも、そいつの知ってるその女子は、外面(そとづら)だけの存在なんだ。そんなことで好きってというのは、俺は違うと思う」

ちょっと古くさい考えかもしれないけどね——話の最後にそう言って、空野くんは笑った。けれどわたしは愛想笑いさえ浮かべられなかった。

彼の話聞いていて、キュッと胸が締め付けられるように苦しくなっていた。

「じゃあ、さ」

思い切ってわたしは尋ねてみる。

「空野くんは、女の子と付き合うなら、その人をちゃんと知ってから？」

「もちろん。俺は本当の相手を見て、好きになる——いや、好きになりたいって、考えてるんだ」

迷うことなく、彼は答えた。

「——」

胸が、ちくちく痛む。

「ちなみにだけど、坂崎さんはどんなやつが好みなの？」

「わたし……」

どう答えようか悩んでしまう。すると、何かに気づいたように空野くんは「あ」と呟いた。

「ムリして答えなくてもいいぜ。なんていうか、気になってさ。坂崎さんほどの女子って、どういうやつがタイプなのかなあって」

わたしが好きになる男の子。そんなこと、今まで一度も考えたことがなかった。そもそも、誰かを好きになったことさえないのだ。自分の好みなんて、わかるはずがない。

わたしと空野くんはお互い黙り合ってしまう。

彼と目を合わせていられなくなって、机の上の白紙に逃げるように視線を移した。

と、廊下から馴染みのある声が聞こえてきた。その声の主は二人。彼女たちは間もなくして、わたしと空野くんのいる教室に入ってきた。

「お待たせー恵莉！」

「ごめんね、長引いちゃって」

職員室に行っていた友人たちが、ようやく戻ってきたのだ。

「あの化学教師がさあ、長々と講釈垂れるもんだから、こんなにかかっちゃったわ」

「ねちっこい男って、あれだから嫌い！」

辟易している彼女らに、わたしは笑いかける。

「大変だったわね」

手早く帰り支度を済ませると、席を立った。そのまま、友達二人と一緒に、教室を出る。その直前に空野くんに目をやると、彼がわたしに手を振っていた。

「バイバイ、坂崎さん」

「うん……また、ね、空野くん」

教室を一步出たところで、わたしは息を吐き出した。

小林くんの気持ちがわかったような気がした。



今まで、ずっと、そうだった。

わたしは他人(まわり)の目をいつも気にしてしまう。

他人から自分はどう見られているのか？

他人は自分に何を求めているのか？

そんなことに、いつも、気を張っている。

いつからこうだったのかは、もう覚えていない。中学生の頃からだったとも、小学校低学年の頃からだったとも、ハッキリしない。

ただ、イイ子でいれば、親が褒めてくれた。教師が可愛がってくれた。友達が羨ん

でくれた。

そんなみんなの評価を落とさないように、今までずっと、わたしは自分の気持ちを後回しにしてきた。

評価を保つためには期待に応えるしかない。

だから、わがままや、その場の和を乱すようなことを言ったことはない。勉強には人一倍の努力を費やしてきたし、みんなが嫌がる仕事も、率先して引き受けるようにしてきた。

そういうわたしは全部、嘘のわたし。

でも、そういうわたしが、みんなの中でのわたし。

それはなにも学校の中に限った話ではない。

実家のある田舎町でも、そうだ。

古い商店街に、古い木造の家々。広い田畑がそこかしこにあり、大型の家電量販店やスーパーが空いた土地に建っている。

そんな町の小学校、中学校にわたしは通っていた。さすがに高校は違う町だけど、五十歩百歩、高校の周りも田園風景だ。

狭い田舎町では、情報は共有されている。どこの家の誰がどこの大学へ進んだか。そういうプライベートな情報さえも、ほとんど筒抜け状態だ。

「恵莉の評判が良くて、お母さんも鼻が高いわ」

お母さんはそんな言葉をよく口にする。町ではわたしのことさえも、みんなに知れ渡っているのだ。

勉強もなんでもできる『イイ子の恵莉ちゃん』。

町にいとわたしは息苦しい。家の外を歩いていると、誰かに見られているような気がして、とても心休まらない。

だからかもしれない。気づくと、わたしはしばしば、遠くの街へ一人で出かけるようになっていた。

電車で片道四十分もかけて行く、大きな街。無機質なビルがひしめき合い、何千、何万もの自動車がビルとビルとの間を縫って走る。自宅のある田舎町とは全く違う場所。

街には人が溢れていて、みんながみんなに無関心。それに、わたしを知っている人が誰もいない。わたしにとって、そんな街は自宅以上に居心地のいい場所だった。

援助交際を始めたのは、お金の困ったことではない。街頭で配られていたティッシュでテレホンクラブをたまたま知って、興味本位でかけてみたのだ。

最初の頃は勝手がわからなくて、戸惑っていた。それでも、気分がとても良かったのを覚えている。男性に体を貸している間だけ、自分が町で評判の『イイ子の恵莉ちゃん』でいないで済むような気がして……。

でも、最近は違う。援助交際をしていても、前みたいな充足感が得られなくなっている。

気づいてしまったのだ。男の人と繋がっていても、相手の見ているわたしはただの『エリ』で、決して坂崎恵莉じゃないということに。

町にも、街にも、坂崎恵莉(ほんとのわたし)はいない。

そこにいるのは、嘘で着飾った、紛い物のわたし。



ブレザー、ナース服、軍服、メイド服……。

「次は巫女装束ね」

「りょーかい」

わたしと柰野くんは、棚に陳列されているコスプレ用品の中から、お目当てのものを見つけていく。ここはパーティーグッズのコーナーで、周りにはありとあらゆる商品がひしめきあっていた。

「あった。これだな」

柰野くんが巫女装束の入った袋を手取る。

「サイズは？」

訊かれて、わたしは手元の買い出しリストを見る。リストはメモ用紙を一枚切り取ったもので、そこには、コスプレする女の子たちのスリーサイズが小さくメモしてあった。

「……あ、ちょっと、見ちゃダメよ！」

胸にリストを押し当てる。何食わぬ顔で、空野くんがリストを覗こうとしていた。

「ごめん、ごめん」

悪気を感じさせない笑顔で謝られる。

「あとはなにが要るのかなって思って」

「もう、こういう大事なものを、男の子は見たらいけないの。女の子に吊るし上げられちゃうわよ？」

「そ、それは恐いな……」

彼を軽くたしなめながら、巫女装束を一着、買い物カゴに入れる。買い物カゴは空野くんが持ってきている。

「次は？」

「えーと、次は……チアガールね」

わたしと空野くんは文化祭の準備のために、必要なものを買いに街まで来ていた。

わたしのクラスの出し物はコスプレ喫茶。女の子たちが様々な衣装に身を包み、お客さんにコーヒーなどを販売する。他のクラスと被らない出し物を、ということで、みんなが意見を出し合った結果だった。

担任に出し物を説明するときには、こんな色物な企画が通るのだろうか、と不安だった。しかし、担任は目を輝かせて「イケるんじゃないか？」と太鼓判を押す始末。そんなにコスプレは市民権を得ているのだろうか。

とにかく、わたしたちは文化祭でコスプレ喫茶を開く。そのための衣装(コスチューム)一式を、休日の今日、代表者二人でこうして買いに来ているというわけだ。

その買い物も、『婦警さんなりきりセット』をカゴに入れたところで、終わりだった。

「これで全部ね。会計しちゃいましょう」

レジで商品の代金を支払う。十数着も買ったので、けっこう値が張った。

買った物は、紙袋二つ分。

何も言わずにその両方を、空野くんは手に取った。

「重いでしょ。ひとつ持つわ」

「いいよ。こういう力仕事は、女子にはさせられないし」

「……ありがと」

店を出る。

外はまだ明るい。よく晴れた空に、霞がかかった雲がいくつか横たわっている。知らない人で街は溢れていて、わたしは、なんだか安心してしまふ。

「やっぱりここまで来ると、人が多いな……」

人波の中を歩いていると、少し後ろから、辟易したように空野くんが言った。振り返って尋ねてみる。

「疲れた？」

「そういうわけじゃないけど、俺、人が多い場所ってあんまり得意じゃなくて……」

「じゃあ、休憩していく？」

空野くんの「え？」という声は、雑踏にかき消された。

「あそこ」

少し先にあるカフェをわたしは指さした。

「あそこのお店、落ち着けるし、そんなに値段も高くないわよ」

「へえ。じゃあ、坂崎さんオススメのお店に、ちょっと寄っていい？」

「うん」

わたしと空野くんはカフェに入った。背後でドアが閉じると、通りの騒がしさはほとんど聞こえなくなった。店内にいる客は若い人ばかりだけど、みんな、静かに会話を楽しんでいる。

店員に案内されたのは四人がけの席。

空いている椅子に紙袋を置くと、空野くんはわたしの対面に腰を下ろした。

「このね、バニラグラッセっていうのがオススメなの」

「じゃあ、俺、それにするよ」

店員にバニラグラッセ二人分を注文する。注文を取った店員が奥に下がると、空野くんは珍しそうに周りを見回した。

「坂崎さんは、よくここに来るんだ？」

「そうね」

「ふうん。男子と？」

冗談めかしたふうに訊いてきた。

わたしは笑ってみせる。

「まさか。一人で、よ。ここ、落ち着いて本を読んだりするのは持ってこいでしょ？」

「たしかに、そうだな。街中にあるわりにはうるさくないし……坂崎さんって、この街のこと、けっこう知ってるんだ？」

うん、とわたしは頷いた。

「すごいなあ。俺、あんまりこっち来ないから、この街、よく知らないんだよ。……へえ、そっか。こちらへんをよく知ってるなんて、坂崎さんってカッコイイなあ」

「そんなことないわ。ただ、来てるうちにだんだん詳しくなっただけで……」

空野くんの視線が痛い。

自慢できることなんかじゃない。どこの路地にラブホテルがあるかとか、テレクラの待ち合わせ場所としてどこが便利かとか、わたしの知っていることなんて、そういう下品な情報しかない。

わたしがこの街に来るのはたいてい援助交際をするためなのだ。ついこの間だって、ここから少し歩いた場所にあるラブホテルで体を売った。あの時もらったお金は、たしか、四万だったっけ……。

「坂崎さんってさ」

向かいの席から、空野くんがじっとわたしを見ていた。

「街のことも知ってるわ、勉強もできるわで、ほんとに完璧だよな」

「完璧って……言い過ぎよ」

「だって俺さ、坂崎さんの悪い話、一つも聞いたことないぜ」

わたしはなにも返答できなかった。

誰かから褒められるのは得意じゃない。人から賞賛されることしかできないのに、あまりにも「すごい」と言われるとどう受け答えすればいいのか、わからなくなってしまうのだ。

わたしは、なんて矛盾しているんだろう。

「でもさ、そういうのって、つらくない？」

ドキッとした。

「つらい？」

聞き返すと、空野くんは腕組みして難しい顔をした。

「うーん……なんていうか、坂崎さんみたいに悪いところが一つもない人だと、その分、どっかで苦労してるんじゃないかなって思うんだ」

彼の言うとおりのだ。

わたしはいつも苦しい思いをしている。周囲の目を気にしてばかりで、いつも自分の気持ちを無視している。

「わたし……」

空野くんに打ち明けてみようか。

頭に浮かんできたそんな考えに、わたしは内心で驚いていた。今まで誰にも、自分の胸の内をさらそうと思ったことは無かった。なのにどうして、空野くんに対してはこんな考えを抱いたのだろうか？

首を横へ振る。それは彼の言葉とともに、わたし自身の中に生まれた感情をも否定する仕草だった。

「そんなことないわ。わたし、つらくなんてないもの。それは空野くんの考えすぎ」

よ」

わたしは努めて明るく、嘘に聞こえないよう言った。返事を聞いた空野くんは納得いかない顔つきだったけど、たった一言「そっか」と呟くと、もうそれ以上、何も尋ねてこなかった。

しばらくすると、注文していた二人分のバニラグラッセがテーブルに運ばれてきた。白く泡立っている飲み物だ。たしか、バニラと牛乳を混ぜて、冷やしたものだだった。

お互い、ストローでそれを口に含む。

「わっ、すげえうまい！ なにこれ!？」

空野くんはキンキンに冷えたバニラグラッセを気に入ってくれたようだった。

わたしはというと、いつもは甘いだけのバニラグラッセが、今日はなんだか甘酸っぱく感じられた。



放課後や休日は、どこのクラスも、文化祭の準備に追われた。わたしのクラスも例外ではなく、文化祭に向けて、全員が一丸となっていた。

そして迎えた文化祭当日。

みんなの努力の甲斐もあって、うちのコスプレ喫茶は開店直後から上々の出だし。お客さんは絶えることなく次から次に入ってきてきている。

わたしは開店直後に店番が入っていた。ちなみに、わたしの衣装は白のナース服。商品の袋には、ご丁寧にも、ナースキャップと白のタイツまで入っていた。こんな格好、正直恥ずかしい。けど、代表者のわたしが恥ずかしがっていたら示しがつかない。

わたしは店番として、しっかり仕事を全うした。

お店は一つの教室を丸々使って営業している。教室内の半分を客席にして、もう半分が厨房という具合。コスプレした女の子が客席を受け持ち、厨房には男の子たちが詰めていた。

コスプレ喫茶を開いたのは、やっぱり、わたしのクラスだけ。そのぶん、目立ったのだろう。学生以外にも、両親や近隣住民の人たちも、たくさん来てくれた。

接客する側もされる側も、楽しんでいた。

企画は成功だ。

わたしは胸を撫で下ろしながら、店番を終えた。本当はまだ、閉店直前にも店番することになっているのだが、ひとまず、これで休憩できる。

喫茶店を出ると、すぐ隣の教室にわたしは入った。この教室も、うちのクラスが借りている。用途は、荷物置場と、女の子の更衣室だ。

こっちの教室も、前面と背面の黒板の間に暗幕を垂らすことで、二部屋に区切られている。更衣室はもちろん、窓側の区画だ。

わたしは更衣室に入ると、ナース服から学校のセーラー服に着替える。さすがにコスプレしたまま他を回るわけにはいかない。宣伝にはなるだろうけど。

「恵莉！」

教室を出ると、ちょうど友達の集団と会った。

「喫茶店のほう、終わったの？」

「うん。まだ、最後に一仕事あるけど。当分ヒマよ」

「じゃあさ、アタシらと見て回ろうよ」

それからは、ずっと、友達の子たちと一緒に学校内を見て回った。狭い廊下は人でごった返っていて、どこも盛り上がっていた。ただ、街と違って、文化祭の人ごみは落ち着けない。顔見知りの子たちが多いからだろう。

それでも、みんなに合わせてわたしは笑っていた。せっかくの文化祭、せっかくの楽しい場なんだから、みんなと一緒に楽しまなきゃいけない。少なくとも、表面上だけでも。だから、無理やりにでも笑顔を浮かべていた。

文化祭で賑わう学校――。

その真ん中にいるのに、わたしの気持ちは冷めていた。賑わいも、友達の笑い声

も、全てが遠い世界のことかと思えて……。

まるで、テレビを見ているような気分。

そんなふうなうちに友達と過ごしているうちに、店番の時間になった。

閉店直前の時間帯。最後の店番のメンバーの中には、杢野くんも入っていて、彼は厨房でコーヒーを淹れていた。

「いらっしゃいませ！」

店番をしている間は、余計なことを考えずに済むから、気楽だ。

「杢野くん、コーヒーひとつね」

厨房に顔を出し、オーダーを伝える。杢野くんは学ランを脱いでいて、代わりにエプロンを着ている。その姿はちょっと様になっていた。

「はい、お待ち」

杢野くんはブラックコーヒーを紙コップに注ぐと、わたしに手渡してきた。それを受け取り、客席に持って行く。その途中、右足の外側になにかがぶつかってきた。

「あっ」

突然のことに、わたしはその場で尻餅をついてしまった。鈍い痛みについ、顔が歪んでしまう。と、わたしのすぐ隣で、小学生低学年くらいの男の子が立ちつくしていた。

「す、すいません！」

客席にいた母親らしき女性が走ってきた。パーマのかかったヘアスタイルが印象的な、三十後半くらいの女の人だ。

「ちょっと目を離したスキに、うちの子がぶつかっちゃって……ほら、たっくんも謝る！」

女性が男の子の頭をグイッと手で押さえ込む。すると男の子はたどたどしい口調で、おねえさんごめんなさい、とだけ言った。あまり心のこもった謝罪ではなかった。

「ううん、いいのよ。わたしも周りを見てなかったもの。わたしにも落ち度があるわ。きみこそ、大丈夫？」

男の子に笑いかけてあげる。彼は丸い瞳で、わたしの顔をじっと見ている。

「でも、ごめんなさい……服が」

女性の言葉で、わたしはやっと自分の体を見下ろした。転んだ拍子に、紙コップのコーヒーが全て、ナース服の前面に飛び散っていた。白地の上の黒。かなり目立つ。

「いいんです、服なら替えがありますから」

わたしは周りにコーヒーがこぼれていないのを確認してから立ち上がった。それから、近くにいた巫女装束の子に一言断わって、店を一旦抜ける。

喫茶店を出て、すぐに隣の教室へ入る。

暗幕で作られた即席の更衣室で、わたしは改めて自分の体を見下ろした。胸元からスカートにかけてコーヒーが染みを作っている。上着を脱いでみると、幸いなことに、下着にまでは浸透していなかった。ナース服の生地が分厚かったためだ。

しかし、どうしたものだろう？

コスプレ衣装の替えなんて用意していない。他の人のを拝借するという手があるけど……。

「坂崎さん？」

暗幕の向こうから声がした。杢野くんだ。

わたしは反射的に、脱いだナース服で下着姿の上半身を隠した。実際には、向こうからこっちは見えていないのだけど。

「コーヒー、かぶったんだって。大丈夫か？」

「うん、わたしはなんともないけど……衣装のほうが」

「店番は続けるんだろ」

もちろん、とわたしは答えた。

「他のやつの衣装借りたら？」

杢野くんの提案に、わたしは頭を振った。そんなことはさっきから考えていた。

「そうなんだけどね。あんまり、他の子の勝手に借りるのって、嫌なの。迷惑かけ

ちゃう気がして」

「他人行儀だなあ、坂崎さんは」

笑い混じりに空野くんが言った。

そう言われてもしかたがないのかもしれない。実際、わたしとみんなは他人だ。よく話す子であっても、わたしはいつも、本音では話していない。意識しないうちに、みんなと一定の距離を取ろうとしている。

だから、こんな時でも、他の人に頼ってはいけないと、そう思ってしまう。

「セーラー服じゃあ、コスプレにならないもんなあ……」

そう言った空野くんが、突然「あ！」と声をあげた。

「そうだ。ちょっと待ってて」

「え？」

「いいこと思いついたんだ。すぐに戻ってくる」

それだけ言い残すと、空野くんは教室を出て行った。

彼はなにを思いついたというのだろう？

疑問に思いながらも、言われたとおり、その場でしばらく待ってみる。と、教室のドアが開く音がした。暗幕の向こうから、空野くんの声がわたしを呼ぶ。

「空野くん？」

「ほら、これ着なよ」

その言葉とともに、暗幕の下を通過して、一着の服がわたしの足もとに滑り込んできた。男の子の学生服だ。

「これ、空野くんの？」

「そ。それ着れば、男子学生のコスプレってことで、押し通せるでしょ」

わたしは学ランを拾い上げた。大きい、紺の学生服だ。内ポケットには、金色の糸で『空野秀重』と刺繍されている。

「空野くんは服脱いじゃって、どうするの？」

「俺は部室にジャージがあったから、いま、それ着てるんだ。まさか下着姿でコーヒ一淹れるわけにはいかないじゃん」

「それは、そうだけど……」

彼の気遣いは嬉しい。それでもやっぱり、わたしはためらってしまう。

空野くんの制服、本当に、着てもいいの？

そんなわたしの気持ち暗幕越しにも伝わったのか、空野くんは少し真剣な口調で言った。

「坂崎さん。それ、使ってよ。俺は迷惑だなんて全然思わないし。な？」

彼の言葉は太陽の光のようだった。聞いていると、それまでずっと凍らせていた気持ちが、ゆっくりと溶けていくみたいで。

胸の奥が熱くなってしまった。

「……うん。ありがとう、空野くん」

わたしは彼の学生服を胸に抱きしめながら、答えていた。小さな呟きだったが、それでも彼には届いたようだ。よし、と彼が頷くのが聞こえた。

「じゃ、俺、先に店のほう戻ってるから」

駆けていく足音。それから、ドアが開き、閉まる音。

暗幕の向こうの、空野くんの気配が消えた。

彼の学生服に、顔を埋めてみる。鼻腔いっぱい空野秀重の匂いがひろがった。



最後のお客さんが帰って行って、しばらくすると、文化祭の終了が校内アナウンスで報された。

学校内のいたるところから拍手が湧き起こる。わたしの喫茶店でも、その場にいた全員で「お疲れ様でした」と互いをねぎらい合った。

文化祭が終わると、すぐに後片付けをしなければいけない。学校側から借りていた長机やパイプ椅子は返却。使用していた教室の装飾も全て撤去。

最後の店番で、コスプレしていた女の子たちは、着替えのために隣の教室へ移動す

る。わたしもその中に混じって、更衣室に入った。

みんながコスプレ衣装を脱いでいく中、わたしは一人、セーラー服の入ったバックを持つと、そそくさと更衣室を出る。一人の女の子が「恵莉ちゃんはここで着替えなの？」と尋ねてきたので、「うん」と一言だけ返しておいた。

ドアをくぐる寸前、誰かが「あの制服、誰のだろう？」と口にしていて、ドキッとしました。

更衣室でみんなと着替えていれば、この男子用の制服に関して、質問責めに遭うのは火を見るより明らかだ。空野くんの制服をわたしが借りていると知られたら、なにかとややこしいことになる。そして、そうなれば、空野くんにも迷惑がかかってしまう。

だから、わたしは一人、別の場所で着替えようと考えていた。

隣の教室で喫茶店の片付けをしているはずの空野くんを探す。

いた。

彼は教室内の装飾品を取り外している最中だった。近づいていき、話しかける。

「空野くん。一緒に来てくれる？」

「ん？ どうして——」

わたしは制服の第二ボタンの辺りを指さした。

「——ああ、わかった」

空野くんはすぐにわたしの意図するところを理解してくれた。作業を他の人に頼むと、わたしと一緒に、教室を離れる。

廊下には片付けの作業に追われる生徒たちが大勢溢れていた。そんな人ごみをかき分け、連絡通路から別館へと移る。

別館はシンと静まりかえっていて、人の気配がしない。文化祭でもこっこの校舎は使用されないのだ。遠く、生徒達の賑わいが聞こえている。

わたしは別館の中でも、特に人目につかないトイレの前で立ち止まった。

「ありがとう、空野くん。制服、貸してくれて。おかげですごく助かったわ」

「いいよ、これぐらい。どうってことないよ」

ジャージ姿の空野くんは屈託のない笑顔を浮かべる。

そんな彼に、わたしは、思わず魅入ってしまった。

「——空野くん」

胸の奥から、言葉が溢れて来る。わたしの気持ち。それが口からこぼれそうになる、その寸前で、わたしはなんとか踏みとどまった。

「じゃあ、ちょっと着替えてくるから、待ってて」

「りよーかい」

わたしは女子トイレに駆け込んだ。個室に入ると、鍵を閉め、バックをドアの上部にかける。そのドアに、背中をもたれさせると、思わず息が漏れた。

自分の手元を見る。長すぎる袖に、親指の付け根までが隠れている。彼の体の大きさを実感する瞬間だった。

この制服は、たんなる服ではない。毎日、彼の汗や匂いを吸って、彼の体の一部にまで昇華されている服だ。そして今、その彼の体が、わたしの全身を包んでいる。

そう思うと、胸が苦しくなった。

一番上から学ランのボタンを外していく。

さっき、彼に言いかけた言葉。

——脱がせて。

はしたない言葉。けれども、それと同時に、あれはわたしの本心でもあった。彼になら裸のわたしを見せてもいい——いや、見せたい。心の底で、そう思ったのだ。

言えなかったのは、わたしが臆病だったから。本当の自分をさらけ出す勇気を、わたしはまだ持ち合わせていなかった。

でも、いつか、彼に見て欲しい。

何も身に着けていない、ありのままのわたしを。



文化祭が終わってから、初めての援助交際。
今回もらったのは五万円。なかなかの金額だ。
別段、お金に困っているわけではない。ただなんとなく、文化祭の準備が忙しくてしばらく男性に抱かれていなかったから、したくなっただけ。
わたしはインランなのだろうか？
うん……きっと違う。
インランなら、もっと気持ちいいはずだ。
今回の相手は、前回の人とは真逆で、自分から責めまくるタイプの人だ。ことあるごとに、「気持ちいいでしょ？」としたり顔で訊いてくる。本当はうっとうしいけど、愛想笑いしながら「うん、すっごくイイ」と答えておく。
もっとも、何もなくていいぶん、今日は楽だ。
挿入(い)れさせてからずっと、正常位のままで男性は突いてくる。単調な往復運動を繰り返すばかり。ちっとも気持ちよくない。
自信に満ちた男性の視線を感じたくなかったから、目はつぶっておくことにした。
見えるのはまぶたの裏の暗い世界。聞こえるのは耳障りな男性の息づかいと、ベッドの軋む音。
わたしが援助交際をしているなんて、クラスの誰も知らない。もちろん、空野くんも。
わたしのこんな姿を知ったら、空野くんはどう思うだろう。軽蔑、嫌悪、忌避。どれも似たようなことだ。いい印象は持たれないはずだ。
でも、もし、受け入れてくれたら？
裸になったわたしを、抱きしめてくれたら？
空野くんを抱きしめられるわたし。
そのことを想像した瞬間——
「あっ！」
——わたしの喉から、ひときわ大きな声が漏れた。
わたしの中を掻き回す男性が、得意げに何か言ったけど、そんなことに意識を割いている余裕なんて無い。
「はっ、あ、あ……！」
男性に突かれると、自分の意志とは無関係に、唇から息が押し出されてしまう。感じている演技(ふり)ではない。
空野くんのことを考えると、自慰のとき以上の快感がわたしの中を駆け巡った。背骨の末端から、頭の奥まで。強烈で、甘い痺れが何度も襲ってくる。
いつしか、わたしは、空野くんを抱かれているような気分になっていた。
一つになったまま、一心不乱にわたしを突き上げる空野くん。わたしの胸や腰に触れながら、一緒に絶頂を目指している。
お互いの息づかいさえ、一つになりそうだ。
間もなくして、大きな波が押し寄せてくるのを感じた。
「ダメ、わたし、イっちゃいそう」
そう言うと、空野くんは「一緒にイこう」と囁いて、唇を寄せてきた。舌を絡める熱い口づけ。彼の舌先から、銀色の糸のように、唾液が垂れてくる。わたしはその糸を、自分の舌で巻き取るのだ。
空野くんはさらに荒々しく腰を突き出し、わたしを後押しする。そしてあっけなく、わたしは大波に飲み込まれた。
「イっくう！」
経験したことのない快感に、背筋が反り返ってしまった。腰が震え、けいれんは爪先にまで伝播した。
長い時間、波にたゆたうように、わたしは幸福感の中にいた。
目を開ける。
わたしの上にはいたのは、空野くんではなく、ただの見知らぬ男性だった。途端、絶

頂の余韻が冷めていく。

「キミがすごく締め付けるものだから、私も思わずイっちゃったよ。そんなに気持ち良かったかい？」

男性は満足げに笑っている。

「うん……わたし、すっごくいい気持ちだったよ」

目を開けるまでは。

わたしは胸の内でそう付け加えた。

男性にイカされたのは、これが生まれて初めてのことだった。わたしを初めて絶頂まで導いたのは、想像の中の柰野くん。だけど現実では、この、どこの誰とも知れない男の人。

そう思うと、無性に悲しくなってしまった。



昼休みに、友達とお弁当を食べている時だった。

「坂崎さん」

柰野くんの名前を呼ばれて、わたしは危うく、ご飯を喉に詰まらせかけてしまった。ご飯の塊を嚥下(えんか)してから、呼ばれた方を見る。

柰野くんはわたしのすぐ近くに来ていた。

「打ち上げについて、ちょっと話なんだけど」

「ああ、打ち上げ……いいわよ」

わたしは隣席で昼食をともにしていた友達に一言断わって、柰野くんの方を向いた。

「どこかいい場所、見つかったの？」

「うん。先輩がバイトしてる焼き肉屋なんだけど、けっこう安いメニューがあってさ——」

文化祭の打ち上げで使う店について、柰野くんは説明してくれる。その話を、彼の目を見ずにわたしは聞いていた。彼と目が合うと、どうしても、この間の援助交際のことを思い出されてしまうからだった。

「——で、代金についてなんだけど、一人あたり」

その時、教室のドアのほうから、男の子が柰野くんを大声で呼んだ。話を中断して、柰野くんはドアの方を見る。わたしもその方向へ視線を向けた。

教室の出入口に、こっちを覗き込んでいる女の子の姿があった。黒いロングヘアと不安そうに寄せた眉が、周囲に暗い印象を与えそうな女の子だ。

「坂崎さん、ちょっとごめん」

わたしから離れて、ドアの方へ柰野くんは駆けていく。女の子は、柰野くんが近づいてくると表情を明るくした。どうやらあの女の子が柰野くんに会いに来たらしい。

廊下に出たところで、楽しそうに二人は会話をし始める。

知り合いだろうか？

そう思いながらドアの方を見ていると、隣の席の友達が言った。

「あー、あの子。柰野のカノジョでしょ」

「え？」

聞き違いだと思い、わたしは反射的に聞き返していた。

もちろん、聞き違いなんかじゃなかった。

友達はまだ一度、同じ言葉を繰り返す。

「柰野のカノジョ、恋人だよ、あの子。あのとおり地味で暗い子で、友達もそんなにいない、変わった子ってことで有名なの。まさか柰野があんなのと付き合うなんて、驚きだよな？」

「そ……」

箸を持つ手が震えていた。

「そうかもね」

「どんな趣味してんだか」

お弁当を食べながら、友達はその悪口を言った。わたしはもう食べる気が無くなっ

ていた。箸でつかんだご飯の塊を、口もとまで運べない。

やがて、空野くんは女の子と別れて、わたしのところへ戻ってくる。

「ごめん、ごめん。たしか、打ち上げの話だったよね。えっと、どこまで話したっけ」

「空野くん、あの子と付き合ってるってホント？」

わたしの質問に、彼は一瞬、目を見開いた。

「そうだけど。あれ、俺、坂崎さんに言ってなかったっけ。文化祭終わった日にさ、話があるって言われて……告白されてさ。それで、付き合うことにしたんだ」

恥ずかしそうに空野くんは後頭部を掻く。

わたしは何も言えない。いや、何を言えればいいのか、さっぱりわからなかった。

すると、沈黙を縫って、友達が横から口を挟んだ。

「ねえねえ、空野ってさ、ああいう暗い子が好みなわけ？」

「む。あいつは暗くなんてないぞ」

友達の質問に、空野くんは露骨に眉をひそめた。

「ちょっと引っ込み思案なだけで、根は明るいんだぜ。中学の頃から知り合いだから、俺、知ってるんだ」

「へえ、あの子と同じ中学だったんだ？」

「そ。中学時代にいろいろあって、それからよく話す仲なんだ。だから、あいつがどういうヤツかってのを、俺は知ってるつもり。表面上は暗いかもしれないけど、ホントは違うんだ」

空野くんは楽しそうに、彼女のことを話す。

彼女のホントの顔を知っている、と。

「坂崎さんには話してなかったな、ごめん」

わたしは、空野くんの顔をじっと見た。

彼は笑っていて、わたしは――

「ううん、いいの。そんなの気にしないわ」

――彼に合わせて、表情を取り繕った。

本当は心の中がグチャグチャで、笑顔になんてなれそうにない。だけど、わたしは無理やり笑顔を作る。いつものように、嘘の自分を相手に見せる。

「おめでとう。彼女のこと、しっかり大事にするのよ」

言いたくもない言葉を口にする。

空野くんはそんなわたしの心なんて知りもしないで、嘘のわたしを見たまま、「ありがとう」と答えた。

「恵莉？」

席を立ったわたしを、友達が見上げる。

「ごめんなさい。ちょっと、お手洗いに行ってくるわ」

「え、大丈夫？」

空野くんが心配してくれる。でも、そんな心遣い、要らない。

わたしは友達にも空野くんにも、それ以上なにも言わず、教室を小走りで出た。一番近くの女子トイレを通り過ぎ、誰もいない、別館のトイレへ駆け込む。

個室に入る。

便座のカバーを開ける。

便器の底に溜っている水に向かって、わたしはさっき食べた物をすべて吐き出した。



「ゴム無しで、一万円で……いいですよ」

受話器越しに、相手の男性が驚くのが聞こえた。

電話ボックスのガラスに、自分の力のない顔が映って見える。着ているのはセーラー服。公衆電話の横の荷物置場には、学校の鞆が乗っている。

わたしは、学校が終わると、いつもの街へ来ていた。家に……町に帰りたくなかった。わけもなく、大勢の見知らぬ人間の中に身を置きたかった。

空はもう薄暗く、電話ボックスの蛍光灯が頼りない光を放っている。

「はい……じゃあ、三十分後……そこで待ち合わせということで」

相手と約束(アポ)を取り交わすと、わたしは受話器を元の位置に戻した。排出されたテレフォンカードを片付ける。

出なくちゃ——。

そう思いながらも、わたしはその場に座り込んでしまう。体に力が入らない。なにもやる気がしない。電話ボックスのドアに背を預ける。

「あ……」

視界が滲む。涙が溢れてきていた。

いけない。泣いた直後の顔なんて、相手に見せるわけには。

わたしは袖で涙を拭った。けれど、なんど目元をこすっても、涙が溢れてくるのは止まらない。だから、すぐに拭うのをやめた。

「見てよ……」

電話ボックスの中で座り込んでいるわたしを、たくさんの通行人が怪訝な目で見ては、通り過ぎていく。

「裸のわたし、見てよ……」

[戻る](#)